



OVERSEAS

East Timor —東ティモール民主共和国—



海外事情

東ティモール国の生活と風習



松島 秀夫 MATSUSHIMA Hideo
大日コンサルタント株式会社 / 海外事業部 / 部長代理

道路・橋梁・洪水対策の指導

東ティモールはインドネシア、パプアニューギニア、オーストラリアの中間に位置する人口120万人の小さな国である(図1)。

中部国際空港からインドネシアのバリ島まで6時間。そこから東へ2時間のフライトで、東ティモール国の首都デシリ(Dili)に着いた。JICA案件の国家開発庁(AND)組織能力強化専門家として道路・橋梁・洪水対策を指導するため赴任した。東ティモール国は、多くの人から「紛争地域であり、いまでも日本の自衛隊

を含む国連軍が常駐する国だから治安に気をつけるように」と言われていた。

それぞれ途中一次帰国があった2012年6～11月までの5カ月間と、2013年4～10月までの6カ月間にわたり東ティモール国で生活してみると、今まで聞いていた情報と現地の治安の違いに驚かされた。そんな東ティモール国の生活と風習を多くの人に知ってもらいたい。

気候

日本との時差が無いので、会社

や自宅との連絡は便利である。日本と逆の南半球に位置するので、東から上る太陽は北の空を回って西に沈む。北の空に太陽があることに慣れていないから、散歩していて北と南をよく間違える。日本人ならば、来たばかりのときはみな同様である。南半球の夏は北半球の冬であり、最高気温30℃、最低気温21℃は涼しく感じた。お盆に日本に帰ると暑くてたまらなかった。雨季と乾季の区別があり、7～12月が乾季である。マウビシ(Maubisse)やアイナロ(Ainaro)のような山間部は標高が1,000～1,500mもあるため、もう一枚長袖シャツやウインドブレーカーが必要である。

食事

ピザやパスタ、ステーキを食べられる西洋料理、中華料理、リアルでない日本料理、タイ料理、インドネシア料理の店がある。

野菜市場にはいろんな種類の芋がある。会議や打合せ時のお茶うけとして、芋を出されることが多かった。果物もいろんな種類が野菜市場に並んでいて、パパイヤやバナナ



写真1 海岸沿いのレストランと夕日

は年中あるが、好きなスイカは4月だけであった。マンゴは8月に限定された。季節感の強い地産地消のようだ。ビールはビンタン・ビールがよく飲まれている。

海岸沿いのレストランで夕日を見ながら食べる食事は絶品だ(写真1)。レストランでは、炊いた米(長粒米)、チキン、魚、野菜炒めを皿に入れて並べてあり、好きなものをとって食べた分を支払う方式が多い。リキシャ(Liquisa)のロエス川に行ったときは、トゥモロコシやエビ、貝の串

焼きもあった。

通貨

アメリカの米ドルをそのまま使っているが、1ドル以下の硬貨は5, 10, 25, 50センタボ(centavos)という東ティモール国独自の硬貨が使われている。2013年から、1ドルに相当する100センタボ硬貨が普及し始めた。銀行口座からドルを引き出す際には、100ドル紙幣ではなく、100枚単位の10ドル紙幣または20ドル紙幣の束で渡される。

漁業・農業・鉱業

海岸では毎日漁師が魚を獲ってきて、いろんな場所の道端で魚を販売している(写真2)。魚は漁師や魚屋の冷凍技術が悪いので、刺身で食べるのは危険だと言われている。

主食の米を作る田は、海岸沿いの平地ではマナツト(Manatuto)やパウカウ(Baucau)で見ることができる。デイリから国道2号を南下して標高1,000mのアイレウ(Aileu)には広い田があった。さらに南の標高1,400mのマウビシ(Maubisse)にはコーヒー畑があり(写真3)、6月の青い実は8月になると赤褐色になる。東ティモール国のコーヒーはおいしい。

また、南方のティモール海には海底油田があり、オーストラリアとの共同開発による収入は貴重な財源になっている。

スポーツ

東ティモールの人はサッカーが好きだ。子供はどこでもボールを蹴っている。広場では大人がサッカーゲームを楽しんでいる。滞在しているホテルのすぐ近くにスタジアムがあり、サッカーの国際試合となるアンダー15のシンガポール代表と東ティ



図1 東ティモール国位置図



写真2 魚を売る人



写真3 マウビシのコーヒー



写真4 ダレの喫茶店

モール代表の試合等が開催される。入場は無料。照明塔に上ったり、車の上から見たり、家の屋根等から観戦する人が多い。

東ティモール国の歴史

16世紀頃から約4世紀の間はポルトガルの植民地であり、第二次世界大戦時に日本が占領し、戦後ポルトガルの植民地に戻った。そのためか、東ティモールのほとんどの人はカソリック系キリスト教徒である。

ディリから車で30分、ディリを見下ろすことができる標高400mの国道2号線沿いにあるダレ (Dare) には、大戦中、撤退せずに小部隊で日本軍と対峙したオーストラリア軍の基地跡があり、現在は記念碑が置かれ、隣に喫茶店があった(写真4)。

1975年にポルトガルの植民地支配が終わった後の24年間はインドネシアが侵略し統治した。その間、東ティモール人によるインドネシアに対する独立運動が継続され、特に1991年に起きたサンタクルス墓地大量虐殺事件は有名である



写真6 ディリ市内の破壊されたままの公共建物

(写真5)。

1999年から独立戦争が始まり、2001年に独立国家としてスタートしたが、2005年に国連の平和維持軍が撤退すると、翌年には元国軍兵士や若者が政府庁舎を焼き討ちしたことで内乱状態に陥った。2007年8月の総選挙で、当時大統領だった独立闘争の英雄シャナナ・グスマン大統領は、象徴的で実権のない大統領職を辞めて、政権の実権を握るために野党を率いて、それまでの与党フレテリンと戦い、総理大臣になった。

痛んだインフラ

ディリ市内には、今でも多くの破壊されたままの公共建物がある(写真6)。内乱が続くと、道路や橋の維持管理ができないため、路面は荒



写真5 サンタクルス墓地と虐殺事件の看板

れた状態になる。国道2号線のアイナロでは、急峻な崖があるジャカルタ・セカンドという地点で、地すべりが進行して道路の一部が崩壊していた(写真7)。

2013年9月、ディリ市内に多くの交通信号機が設置された。2年前にヘラ発電所が完成し、停電が少なくなり、電気事情が良くなったので設置が可能になったようだ。しかし、信号機は交差点の手前に設置されていて、最前列の運転手には信号が見えない。

治安

滞在中の2012年8月に2回目の総選挙があった。その際、投石に遭わないよう、危険場所に近づかないよう注意を受けていた。選挙はシャナナ・グスマン総理大臣側が勝利し



写真7 ジャカルタ・セカンドの地すべり

たため、フレテリンの暴動が心配され、国連の車にはフロントガラスに鋼製ネットが張られていた。しかし、わずかな投石で終わった。治安が良くなったことを受け、2012年11月に国連軍は撤退をした。国連軍がいなくなると再度治安が悪化するという噂があったが、問題はなかった。

武術集団

ホテルの近くで、時々夜10時以降に騒いでいる声が聞こえる。東ティモール日本大使館の警備班の方の話によると、多くの若者はマーシャル・アーツの武術集団に属していて、他の集団とよく喧嘩をしているそうだ。ホテルの近くの集団は腕に7本の入れ墨線が入っているそうだ。

公用語

現在の東ティモール国は、テトオン語とポルトガル語が公用語である。ポルトガルの植民地時代は、一部の人がポルトガル語を話すだけだったそうだ。インドネシアの統治時代はインドネシア語の教育が徹底された。そして、独立後、政権を取ったフレテリンはポルトガル語を公用語とした。2007年に政権をとったシャナナ・グスマン総理大臣は、テトオン語を多く使うようになった。これは、ナショナリズムを高めようという狙いようだ。

しかし、若い職員はインドネシアの大学やオーストラリアへの留学経験等からインドネシア語や英語を使っている。また、地方では各部族語が使われている。ある調査では、テトオン語がわかる人は87%、インドネシア語が38%、ポルトガル語が16%、英語が4%である。英語のわかる人は少ないが、理解者は増えているようだ。仕事ではテトオン語と英語間の通訳が必要だった。

子供

日本やアメリカでは第二次世界大戦後、ベビーブームになった。今、この国は多くの内乱を経てベビーブームになっている。ディリにも地方にも、子供やお腹の大きい女性がいっぱいいる。この団塊の世代が大人になったとき、経済が発展して就職できるようになっていないと治安上、問題になると思う。これを避ける方法の一つは、現在小学校を卒業する生徒が50%以下という就学率を高め、自立できる教育を進めることが大事だと思った。

動物

ディリ市内では鶏を飼っている家庭が多い。また犬が多く、放し飼いにされている。さらに豚もいて、ホテル横のごみ箱の残飯を鶏、犬、豚が漁っている。地方に行っても、鶏、犬、豚が多い。加えて雀も多い。中央庁舎の前にある海岸公園には樹齢500年以上の大木の街路樹があり、3匹の猿が住んでいる。

以前、海岸沿いを歩いていたら、地元の若者たちにヘビを2匹捕まえたので買ってほしいと言われた。また、海岸にはワニの看板があり、ワニに注意するよう警告している。時々ワニが海岸に上がってくるようだ。スアイ (Suai) ではワニが海岸にいた。ディリから東のクリストレイを見ると、突き出した半島はワニのように見える。東ティモール国では、ワニが大きくなってティモール島ができたという伝説がある。

見どころ

ディリ市内ではティモールプラザというホ

テル、映画館、ショッピングモールのある施設が2012年に完成した。また、市内から海岸沿いの砂浜を散歩したり、海岸沿いの道路を自転車で走って約8km東の半島の高さ50mの丘に立つクリストレイ像までのコースは、多くの人が利用している。さらに、ディリから約30km北にあるアタウロ島に行くコースは、釣りやダイビング好きの人に人気がある。

アタウロに行ったときはクジラの群れを見ることができ、アタウロの静かな海岸を楽しむことができた。西洋人はバンガローで宿泊していた。たぶん、真っ暗な夜、南十字星を見ながら、酒でも飲んで語り続けていたのだろう。ちなみに、アタウロには温泉があるが、上陸したベロイ (Beloi) から遠く、行くことをあきらめた。

地方に行くと、浸水の恐れのあるロエス川周辺やスアイ海岸付近では高床式茅葺住宅が見られた(写真8)。一方、山間部では床が地面に着いた茅葺住宅が見られた。

沖縄と同じくらい美しいサンゴ礁のある東ティモール国は、治安が維持されれば、美しい自然を見に来る観光客も増えることだろう。そんな国になってほしいと思いながら帰国した。



写真8 スアイの高床式茅葺住宅